

この人を訪ねて #228

街の福祉の担い手として活躍中

カフェバー&ギャラリー「かのえ」オーナー
広島県南区 民生委員(主任児童委員)

平松 敦子(ひらまつ あつこ)さん 64歳

広島市西区庚午北、私財を投げ打って建て替えたハウスで、地域・社会福祉の「居場所」として、シェアスペース「かのえ」を運営。ボランティア精神に富んだ平松さんは民生・主任委員として、寸暇を惜しんで福祉活動をしている。

カフェバー&ギャラリー「かのえ」以来、のびのびと、広電宮島線・高須駅南口から徒歩で2分、閑静な住宅街のなかにあり、青いところが屋根が目印である。

3年前の2月に、平松さんの祖父で、広島洋画家としてその名が知れた故木 茂さんのアトリエがあったところに建てた。1階にはピアノがあり、30名は入れるホールと小人数の会議室が設けられた。調理場がある。2階は吹き抜け空間と貸しギャラリー。どの部屋の壁にも、祖父の絵が季節ごとにギャラリーとしてかけ替えられ展示される。

私設「公民館」かと間違っ

月間スケジュール表には、低価格での貸し各種教室やギャラリー、高齢者サロン、小学生の「子ども学習室」、「こども食堂」や「障がい者就労支援」などの福祉利用。二十余の利用予定がシェアスペースとしてヒッパシ書かれています。まさに私設公民館のようだ。

講師の平松さんとその生徒さんたちの「裂き織り」のバックや「かこ編み」など作業に利用される。

「かのえ」の名称は「千支の 庚(かのえ) から 名称の『かのえ』は、地名の庚午(こう)と、千支のかのえ(うま)から採られている。ちなみに、庚午地区はおよそ1500年前の「かのえ(うま)・1870年(明治3年)」に農地拡大のため造成された新開地で、いまでは住宅地に大変貌している。

画家祖父の美術センスを引き継ぐ

1959年昭和34年、現住所の西区庚午北町で生まれた平松敦子(旧姓木)さんは、古田小学校、私立ノートルダム清心中・高等学校を卒業。祖父のDNAを受け継いだ平松さんは、武蔵野美術短期大学工芸デザイン科・染織コース専攻し1980年昭和55年に卒業。エプロンメーカーのデザイナーに勤務後、結婚退職し、その後専業主婦として3人の子供を授かる。このままで過ごさない平松さんは、37歳のとき知人の勧めもあり、自宅でトールペイントを中心に子ども工作教室や手作りシルバークセサリー教室を始めた。



平松 敦子 (ひらまつ あつこ)

広島市西区庚午北3丁目在住
1959年生まれ 古田小、ノートルダム清心中・高校学校 武蔵野美術短大工芸デザイン専攻 '80年卒業 専業主婦の傍ら自宅にて子ども工作教室を「裂き織り」講座を中国新聞文化センター等で開催 '13年庚午地区民生・主任児童委員に '20年3月「かのえ」ハウスを建て、子ども食堂など福祉の拠点に 家族:夫、一男二女 孫3人

12年後、大学時代染織を学んだことから、着なくなった古い着物を有効利用する『裂き織り(さきおり)』の教室を、講師として中国新聞文化センターや市内数ヶ所で開いた。

★アップサイクルな「裂き織り」とは

「裂き織り」は、江戸時代中期「もったいない」の発想から生まれた。日本伝統のアップサイクル素材として再び関心が集まってきた。★日本では裂き織りが盛んになったのは、江戸時代衣類に使っている綿や絹が高価貴重であったことや、贅沢禁止令が出され新しい布地が使えず、古いこたつ布団、着物や浴衣を捨てず裂いて作りなおし生地の一部にするという技術がうまれた。

★裂き織りは、卓上の裂き織り機を用いて、好みの色のたて糸に木綿、絹やレーヨンなど比較的耐久性のあるものをよこ糸として古い布をひも状に裂いたものを織り込む方法。よこ糸の素材によっては全く違う「表情」のバックやタペストリーやカバン、衣服まで様々な作品ができる。(★アップサイクルとは「資源には戻されずに価値を高めて再利用」。リサイクルとは「資源にもどして再利用」)

主任児童委員を引き受ける

2013年、54歳の時、近所でお世話になって、自身も民生・児童委員をされている人から、「主任児童委員」をやってほしいと誘いがあった。平松さん自身、不登校の子供を悩まながらも育てたこともあり、地域のために引き受けた。「地元小学校と連携を取り、養育などで困っている母親の手助けになれば」と思っています。と云って、私はカウンスラーではありません。その悩み相談事を聞いてあげ、内容によっては、公的機関へ橋渡しするのが、私の役目です。『私自身子育て当時、子供のことで先の見えないトンネルの中にいて、ある人に相談するも、大丈夫そのうちトンネルを抜けるよと言われたが、釈然としない。しかし悩みを聞いてもらうことで、救われた思いがありました。幸い、その子は中学2年から立ち直り美術

大学にいきました。

★主任児童委員とは

★民生・児童委員の中から選出され、地域の福祉について専門的に担当する。単に民生委員と表現するときには、主任児童委員を含めた民生・児童委員をいう。

★役割は①学校等と家庭の間にある虐待や不安からくるSOSのサインを見逃さない地域の見守り役。②公的専門関係機関、ソーシャルワーカー等との連携。

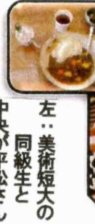
★なお民生委員は、厚生労働大臣から委嘱された非



卓上裂き織り機で作品を制作中 枠内の様なカラフルな布を、細かくひも状に裂いた布を織り込む。正にアップサイクルだ。右が平松講師



左:本日のメニューはカレーライスにスープ、ヨーグルト、煮ものでした。



左:美術短大の同級生と中央が平松さん



3人の子供たちも成人し、孫、が一貫ずついる。



とんがり屋根の「かのえ」ハウス

子ども食堂は毎月第4土曜日 11時半～13時予約制。子どもは無料。大人200円。子どもだけでもOK。給仕する平松さん。

常勤の地方公務員である。地域住民の立場から生活や福祉全般に関する相談・援助活動を行う、創設から約100余年の歴史がある。

東京で「子ども食堂」の始まったいきさつは

ある期間平松さんの実母の在宅介護をしたところ、ある講演会で、東京で居酒屋だったところを借り、「こども食堂」をしている近藤博士さんの話を聞いた。

それは「近くの小学校の副校長先生から『お母さんが体調が悪い時に、学級給食以外バナナ一本で過ごす子供がいる。先生がおにぎりを作り保健室で食べさせている』という話がきっかけで、近藤さんは仲間4人で「だんだん島根の方言のあじの味噌ワゴン」こども食堂」を始めた。

当初は子供だけだったが、小さな子供を持つお母様や一人暮らしのお年寄り、若者も来るようになった。大人は300円、子供は無料に近いワゴンコイン。コインなら、一円でもおもちやでのコインでも何でもいい、自分が払って食べたという気持ちで大事とする。

その後、子供たちの学習支援、大人たちもボランティアで集まりだし、「ワゴン」寺子屋まで始めたという。近藤さんは島根県出身。本職は歯科衛生士。

すぐに実行に移す

この話に、自分が追い求めていたことだと痛く感銘を受けた平松さんは、3ヶ月後2017年6月、近くの集会所を借りて、庚午こども食堂「みんなDEカレー」を始めた。10月には放課後児童学習サークル「みんなDE勉強会」を開始。また翌年8月、学習支援「みんなDE勉強会」を立ち上げた。なお現在、こども食堂は「かのえ(第4土曜)」の他、庚午集会所(第4水曜)、中区鶴見・HAP(第3金曜)の3ヶ所で行っている。

主任児童委員の職責を全うするために

2020年2月、祖父の母の残してくれた、資産を元手に、現在地に「かのえ」を建て、こが平松さんの地域福祉の実現拠点となっている。なぜ平松さんはこのようになことをするのだろうか。主任児童委員の仕事に全うするからには、私の「顔」を知ってもらわねばいけません。より多くの人たちと接触したいのです。

地域の方から、『前から気になっていたのだけれど、近所の子供さんがかかいい、虐待等のトラブルがある』などの情報が入れば、主任児童委員の役目から関係公的機関や専門の人へ橋渡しをする責任があるからだ。

母親の介護が終わる、余裕ができれば「これからの目標にヨーロッパ。とりわけ、スペインの美術品を鑑に行きたいですね」と近所で開催の「スーパード・ボランティニア・ウーマン」は話した。(編集 倉田和峰)